

稿 寄

人口減少社会と

地方都市の活力再生

91

株式会社さくら都市総合研究所

主席 清水 秀幸
研究員



17 都市の景観を 考える

長野市は、同交差点から善光寺までの約800m余りの修景づくりに、10年以上の歳月を費やし、完成させた。沿道地権者や商店主、そして開発会社等の理解と協力を得ての作業であり、幾多の難題を克服しての成果である。あらためて敬意を表したい。

一つの方向性をもった「まちづくり」を造形するためには、そのまちの歴史や資源、そして環境やそこに暮らす人々の生活様式・商業様式など、多くの要素を分析、検証し、政治的・経済的・社会的シンボルを「見える化」

することが必要であり、誰もが納得することが肝要である。

現代のように、価値感が多様化する時代、一つの方向性をもったまちづくりを達成するためには、官民の総力を結集したエネルギーが何よりも大切になるのである。

具体的な街づくりを進めるうえで、必要な景観要素、すなわち、それを構成する主たるものとは、立体的構造物であり、道路であり、植栽であると考えられる。

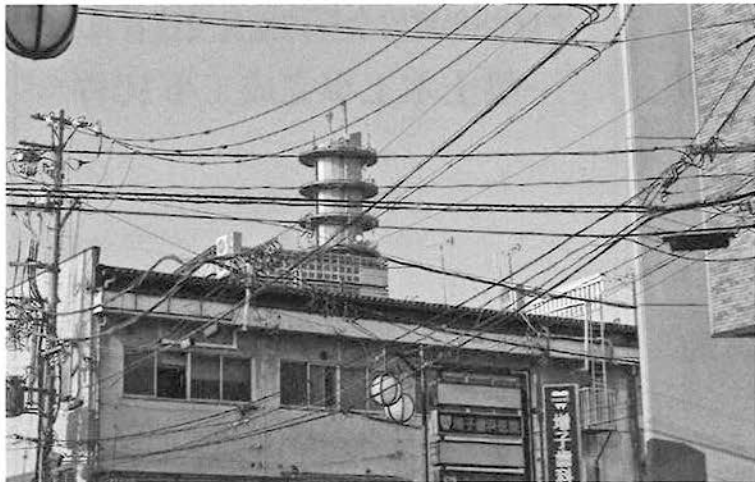
中でも、景観（修景）を造形していくうえで、大きな障害となるのが、「電柱」と、そ

こから所狭しと四方に空間を這（は）う「電線」である。

生活インフラ上必要不可欠であることは承知しつつも、景観上は極めて目障りな存在である。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



空を覆う都市部の電柱・電線網